

老いてなほ期する心や初菫 長閑さや眠る赤子の昼下り 六十年の妻と無言の遠花火 亡き人と逢瀬の契秋彼岸 懐中を師走の風の吹き抜ける	〔0192〕雀部 竹生	初空に富士の麗姿や由比ヶ浜 春泥や転ばぬ先に手を引かれ 大夕焼あしたまたねと帰る子ら 櫓だけ残る城跡萩こぼる 落葉掃く人なき水子地藏かな	〔1051〕高野いくお	吾子摘みし狭庭のふきを炊きにけり 家族旅蟬の林に子等遊ぶ 秋風に「おすきなふくは」と花の精 無花果や里の井戸端妣の顔 煤掃きや御札を下げて明日を待つ	〔1138〕田中 暁星
玉砂利を踏む音すがし初詣 残月の薄れゆく朝汐返る 麴花はや香り立つ酷暑かな まなかひに見ゆ秋冷の大櫓 歩き出す一步に気分小六月	〔0823〕岩崎さよ子	尻で戸を開けるナースや日脚伸び 東京に東京タワー梅雨の月 吾亦紅ただ相槌がほしだけ 竹林にあそぶ風あり年終る 献水の一杓重し初詣	〔1057〕平柳みつじ	悠久をしばしとどめて初日出 山吹に留守をまかせて野良仕事 潮路追ふヨット夕日に溶けて消え 峰よりの磨き抜かれし秋の水 煮凝や旧家に残る大かまど	〔1156〕片山 茂樹
初大師自動券売機に惑ふ 立春や菫に映ゆる芙蓉峰 句碑あまた鳴立庵や夏木立 風に鳴き風に鳴きやみ草雲雀 長雨の庭に点りて櫛子の実	〔0996〕樺澤やすの	波静か初東風や伊豆の宿 入日影雲間に浮かぶおぼる月 かくれんぼ童の声や夏は来ぬ 鰯雲北の大地に牛遊ぶ 何処より冴ゆる鐘の音京の路地	〔1060〕高橋恵津子	祈ぎ事はいつもひとつや初詣 夜半の春感情線の深きこと 遠き日の父の匂ひや麦藁帽 墓碑名をなぞる指先秋に入る 冬すでに庭木の色を攫ひけり	〔1166〕波賀野 秋
異国語も混じる鎌倉初詣 春風に帽子奪われビル谷間 夏来たる無限地獄の日々過ごす もう一杯手酌の酒に月笑う お疲れと背を流し合う十二月	〔1042〕稲垣 稲秋	冬の朝冷たさ温さグウの手に 名残雪雀せつせと庭いぢり 草むしり庭の飛石洗ふ雨 吾子と行く墓原の道彼岸花 霜月や夜半の雨跡白く見せ	〔1113〕田中 湧泉	玉砂利の音を連れゆく初詣 花筏川に余白のまだありぬ 羅を透きたる海の光かな 朝揚げの海の色濃き秋刀魚かな かすかなる漁火ふたつ冬の月	〔1187〕小野りゆうはん
				〔1234〕稲垣 雅	
				元日や決まりのカレー夕餉膳 宇宙よりカプセル帰還寅彦忌	